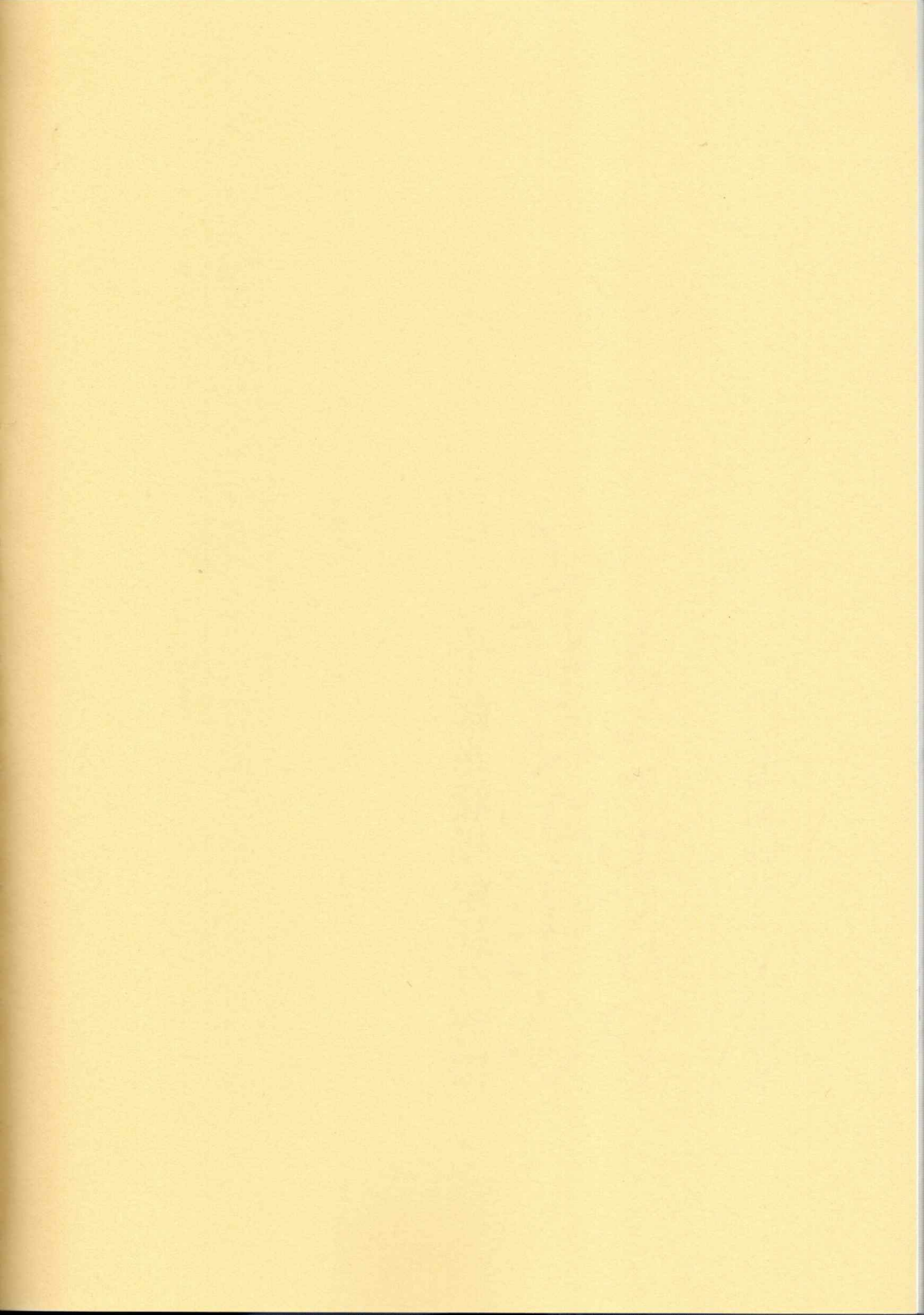


法城寺住職斎藤乘願上人

今、生かされて
ありがとう

弁栄上人と
井村和清医師



法城寺住職齋藤乘願上人

今、生かされて
ありがとう

弁栄上人と井村和清医師

平成二十二年十月八日

愛知・吉良町 徳雲寺法話

弁栄上人筆・阿弥陀如来像



口絵 1



弁栄上人筆・観音菩薩像

法城寺蔵

まえがき

昨年十一月の終わりに、間瀬先生ご夫妻が突然自坊をお訪ねくださいました。私は、十一月の上旬に、吉良・徳雲寺で一時間ほどお話をさせて頂いたのですが、その時の法話をテープに録音し、それを今回文章に起こしたので、目を通して貰いたいとおっしゃるのです。そんなことをしておられるとは露程も知らず、突然の出来事に唯々吃驚致しました。

法話の中で、山崎弁栄上人と井村和清先生の事を紹介させて頂いたのですが、間瀬先生は、この話に大変興味を持たれたようで、冊子にして他の人に読んで貰いたいとの事でした。元来が人前で話をする事を得手とせず、又、それが文として残るなど恐れ多くて、穴があったらどころか、自ら穴を掘って入りたいような居心地の悪い思いで伺っておりました。

ただ、どうやってお断りしようか、とばかり考えておったのですが、間瀬先生のご熱心な利他のお心に触れさせて頂いている内に、ふと一つの思いが浮かんで来たのであります。

年が明けましたので、一昨年のことになりますが、平成二十一年十二月四日は弁栄上人

の九十回忌でありました。当山開山上人でありますので、毎年、御命日にはお軸を虫干ししながら報恩別時念仏会ねんぶつえを開いておりますが、不肖の弟子は九十回忌と言いながら、いつもと同じ念仏会を開いただけで、特別な事は何も致しませんでした。

ところが不思議な事に、それ以来、弁栄上人からの御回向ごえこうが次々働き掛けてくださるので、年に一度だけでなく、毎月念仏会を開くようになったのも去年の正月からでした。弁栄上人のお軸も次から次にとご縁を頂いて増えて行きます。そして弁栄上人展にもひよんなことからご縁を頂くことになりました。

これは、私事ですが、私自身が弁栄上人や山本空外上人（弁栄上人の真髓を継承された尊師）のお心に触れさせて頂き、新しい光の道を歩み始めさせて頂いた年でもありました。全てがこのオヤ不幸者に、大いなるオヤ心を知らせようとしてくださった尊い方々のお導きでありました。

そんな矢先の間瀬先生のお話でありましたので、ひよっとすると、これも又、弁栄上人のお計らいなのではなかるうかと、どんなに鈍感どんかんであつても感ぜざるを得なかつたのでありま

す。もしそうであるならば、邪魔をしてはいけないと思ひ直しまして、お受けした次第でございます。

とは言え、読み返してみても、余りの稚拙ちせつな話し振りに冷や汗をかくばかりです。それでも善知識方の教えを紹介させて頂く中、大切な事に触れている所があるように思いました。

どんなに親心の分からぬ私であっても、しかしどこまでも尚、倦うむことなく生かし続けてくださるオヤ様が居て、そして、私は、今、生かされてここに居る。

その事の勿体もったいなさに、そして不思議さに少しでも目が向きさえすれば、誰でも、今、進むべき道がはっきりして来ると思うのです。

私は、ひそかに、その道を謝恩報徳の道、と呼んでおります。

法然上人の御念仏の教え、又、それを現代に開いてくださった弁栄上人、そしてその本意を明らかにしてくださった空外上人、このお三方さんかたの法流は、敬い・感謝・謙虚さ、そういう大切な生きる根底を見失った迷ひ深き我々に大いなる光となって、指針を与えてくださっています。

正月二十五日、法然上人の八百回忌御命日正当の日に、法然様のお墓参りをさせて頂きました。京都の知恩院（浄土宗総本山）には弁栄上人と空外上人のお墓もありまして、初めてお三方のお墓参りをする貴縁を頂きました。とても清々^{すがすが}しく、改めてお三方のお心に触れさせて頂き、意を新たに致しました。

今回のことも、そういうご縁があつたのでしよう。間瀬先生の皆の喜びを喜びとされる私心無き利他の御心、又その行動に、唯々感謝するばかりです。

南無阿弥陀仏。

碧南市天王町 天王山 法城寺住職 斎藤乗願

平成二十三年一月二十七日

【注】**山本空外上人** 一九〇二（明治三十五）年広島市生。東大卒、独・仏に二年半留学。

広島大教授。四五年原爆被爆。知恩院で得度、京都府法蓮寺住職。光明修養会上首。書家でもある。レーガン米大統領は来日時に、空外上人の書を所望した。中曾根首相は空外を知らなかったが、竹下蔵相の助言で空外書作品を贈った。二〇〇一年遷化^{せんげ}。

はつめい

南無阿弥陀仏十念。

ただ今、ご紹介を頂きました碧南の法城寺というお寺から参りました。法の城と書きまして、法城寺と申します。昨年引き続きまして、又、お話をさせて頂きたいと思ひます。ちようど一年ぶりになりますでしょうか。

昔は、新須磨の海岸に海水浴場がありました。お寺のすぐ目と鼻の先が海でありますから、お寺が海の家となつて、貞照院（碧南市の浄土宗の寺院。徳雲寺や法城寺は、この寺の末寺）様も子供の頃、このお寺へ来ては、海水パンツになつて、そのまま海へ行つた、というような話を聞いております。

私は、埼玉県生まれの東京育ちで、去年お話をしたかどうか忘れましたが、十年ぐらい前にご縁を頂きましてこちらに参りました。そして六年前に、法城寺の住職をお預かり致しましたわけでございます。ですから十年以上前のこちらのことは何にも存じておりません。皆さまのほうがよくご存じでいらつしやると思ひますけれども、現在、海水浴場はあとかたも

なく埋め立てられてしまつて、どこが海だったかな、と言うような景色でございます。

もう五十年以上前のことですが、伊勢湾台風（一九五九年九月二十六日、紀伊半島の潮岬に上陸した台風十五号は、夜、伊勢湾を北上した。そして高潮によりこの地方の護岸堤防は殆ど決壊し、愛知・岐阜・三重3県の死者は5千余の大災害を蒙った）の被害等もありましたので、致し方ないことなのかもしれません。

西三河の写真集等を見せて頂きますと、非常に素晴らしい海岸だったんですね。こんな素晴らしい海ならば一度は泳いでみたかったな、と思ったことでございます。

そういう所に、現在、私が住職をするお寺、この法城寺が明治二十八（一八九五）年に創建されたそうでございます。

この法城寺は、代々尼僧さんのお寺で、庵寺あんじゆだったんです。私の前に五人、庵主あんじゆさんがいらつしやつて、私が六代目になります。私から男の人のお寺になったんですけれども、それまでは尼僧さんの修行道場として作られたお寺なんです。

山崎弁栄上人

その開山上人という、お寺を開いた方がいらつしやるのですが、ちょうど今、控室の書院に、その方の描かれたお軸が掛かっていました。

そのお方は、山崎弁栄上人やまざきべんねいしやうにんというお名前の方でございます。弁当の弁に、栄えるという字を書きまして、べんえい、とおっしゃるんですけれども、この「ん」と「えい」がくつきまして、「ねい」となり、「べんねいしやうにん」というふうにお呼び致しております。

この方は、今釈迦と言われるほどの尊い方であります。現代のお釈迦様と言うわけでございます。

弁栄上人べんねいしやうにんという方をご存じの方はいらつしやいますか。

あ、やはり、この辺の方はよく知っていらつしやいますね。吉良の方はよくご存じですね。全国的にはあんまり有名な方ではないんですがね。なぜなのかはよく分かっていませんけれども、本当に素晴らしいお坊様なのでございます。

弁栄上人の父親

弁栄上人は、下総の国手賀村鷲野谷、現在千葉県柏市で、今から百五十年ぐらい昔、お生まれになった方です。江戸時代の安政六（一八五九）年、明治維新の十年ほど前に生まれ、大正九（一九二〇）年に六十一歳でお亡くなりになりました。六十一歳と言うと、どちらかと言えば短い一生だったかもしれない。千葉県の田舎のお百姓さんの子供だったんですね。こういう宗教的に偉大な方というのは、やはり生活環境が普通とは違います。

お父さんはお百姓さんでしたけれども、毎朝三時に起きて、鉦をたたいて、お念仏をされたそうです。三時からだと、近所迷惑になりますから、暗い内は鉦をたたかず、明るくなってから、鉦をたたいて、お念仏をされた。毎朝三時間もお念仏をされたんですね。

この辺にもお念仏の強者がいらっしやるそうですけれども、月に一度は六万遍（「家康公は陣中でも六万遍の念仏をとなたといわれるが、この嘉平も月に一回くらいは六万遍のお念仏を勤めたい」と毎月十五日には午前一時に起床、白衣、白帯を身につけて、日没にいたるまで称名に励んだ、と講談社刊『浄土仏教の思想』にある）のお念仏を唱えられ

たという方です。お名前が山崎嘉平という方だったもんですから、近所の方からも、念仏嘉平、とあだ名で呼ばれるような篤信の方だったんです。そして、お母さんも、又、非常に信心深い方だったんです。そういう親御おやごさんに育てられたのでございます。

少年時代

そんな家庭環境で成長されたから、子供の頃から宗教心が育っておりましてね。早くも十二歳の時に、今ですと、小学校の六年生か中学校の一年生ぐらいの時に、弥陀みだ三尊さんぞんを空中に見見されたということが伝記に書いてございます。阿弥陀様と観音・勢至の二菩薩が空中に見えたというわけでございます。その時は、阿弥陀様がいらつしやるんだな、という憧憬しんようけい、あこがれが、そういう姿を作ったと思われるわけですが、仏様のお姿を空中に見られたわけですね。

この人は、又、歌も作っておられます。歌と言いましても、短歌のことですが、子供の時から作っておられまして、こんな歌を作っておられます。

仏にも神にもなると聞くからは我も聖にならまほしけれ

仏にも神にもなれるんだったら、自分もどうか仏になりたいものだ、とそういう強い思いが、十二歳くらいから備わっていたようです。

そんな子供ですから、出家したくてしょうがなかったのであります。ところが昔の田舎のお百姓さんですから、お家の仕事をしなくてはいけないというので、時が来るのを待っておられたわけであります。本が好きで、絵が好きで、書が好きで、いろんな分野で発達した人でありました。

青年時代

弁栄上人は、二十一歳になられた時に、漸くご両親の許可を得て出家されます。そして二十四歳の時、筑波山つくはさん（標高八七六メートル）。関東平野に聳える名山。古来多くの修行者が参籠した信仰の山）に籠こもられまして、二カ月間、念仏三昧ぜんまいされたんですね。その前に、前行ぜんぎょうとして、故郷のお寺で三週間ほどですね、掌たなこころに油を溜ためて、灯ひを点ともす。熱くして眠らないよ

うにして、とにかく不眠断食だんじきの修行のお念仏をしたそうです。それから後も、弁栄上人が横になって寝ている姿を誰も見たことはない、と言われております。

その後、筑波山に入りまして、昼間は人に見られないように洞窟ほらくつに籠こもってお念仏をし、夜は崖の端に座って、居眠りをして落下したら、大怪我をするような所で、寝ずに、念仏三昧。麦やら米やらそば粉やら、そんな物だけを食べて二カ月間、お念仏をされたんです。その時、仏様の光に出会われたのです。仏様にお会いになって、お悟りを開かれたわけでございますね。その時、偈文げもん（仏徳を褒め称たたえる韻文いんぶんで、五字または七字を一句とし、多くは四句を一偈いちげとする）を作っておられましたね。

弥陀身心遍法界

《弥陀の身心は法界に遍あまねく》

衆生念佛佛還念

《衆生しゆじやう仏を念ねんずれば、仏も還また念ねんじたまう》

一心専念能所七

《一心専念すれば能所のうじよ（主客）亡ぼうじ》

果満覚王獨了了

《果満かまん覚王かくわう、独ひとり了り了りたり（明らかである）》

こういう偈頌げじゆを作っておられます。阿弥陀様の身も心もこの世に満ち満ちている。果満

覚王というのも阿弥陀様のことなんですが、独り了了としている。この世の宇宙に遍満していて、それが、今、はつきり、はつきりしている、と。

そういう偈、悟りの偈を作られたのでございます。これが二十四歳の時でございました。

最期のお言葉

それからお念仏を広めて行かれるわけでございますけれども、六十一歳でお亡くなりになるまで、臨終のお言葉も、

「ああ、阿弥陀様のお慈悲がこの世に満ち満ちている。しかし衆生しゆじやうは、生きとし生けるものは、それを知らない。それを知らせに来たのがこの弁栄である。南無阿弥陀仏」と言っ
つて、お亡くなりになったと言われております。

つまり二十四歳の時から六十一歳でお亡くなりになるまで、四十年近くも、ずうっと、この事だけを、ご自分でも味わい、そして多くの人たちに伝え続けて行こうとされたのが、弁栄上人の御生涯でございました。

弁栄上人の展覧会

弁栄上人という方は子供の時から、五感が非常に優れた方でいらつしやいました。音楽的才能があり、絵も描かれ、書も書かれ、歌も作られるという方でありました。又、そういう事を通して、阿弥陀様の慈悲を多くの人たちに伝えて行かれたのでございます。絵はとても素晴らしいんです。今、このお寺の書院に釈迦三尊のお軸が掛けてありました。

【注】**釈迦三尊** 中央に釈迦如来、左右に脇侍の文

殊・普賢両菩薩。文殊菩薩は仏の智慧を象徴する菩薩。獅子に乗って釈尊の左側に侍す。普賢菩薩は仏の理法・修行の面を象徴する。白象に乗って釈尊の右側に侍す。

ここに、こういう図録がございます。これは、この間できたばかりのカタログなんです。

ちょうど今、弁栄上人の書画の展覧会が開催さ



山崎弁栄展

宗教の彼方、新たな地平

Yamazaki Benrei Exhibition Beyond Religion Toward New Horizons

平成22年10月30日(土)~11月14日(日)



山崎弁栄 Yamazaki Benrei

1859年(安政6)~1920年(大正9)

下総国手賀村篤野谷(現在の千葉県柏市篤野谷)に生まれる。浄土宗篤信の農家に育ち、20歳で出家。以来、仏道修行と伝道の生涯を送る。自らの信仰を光明主義と呼び、仏教の根柢に帰し、念仏によって阿弥陀仏の光明のなかに生きることを探った。法然の再来、近代最大の宗教思想家といわれる。

第一空間

山崎弁栄の書画と靈性

エクリチュールとしての書、

スピリチュアリティの表現としての書画

会場: gallery OUTRE(アウトレ)

岐阜市泉町16 山木ビル1F

開館時間: 午前10時~午後6時

第二空間

山崎弁栄の人と思想

会場: 長良川画廊

岐阜市泉町16 山木ビル2F

開館時間: 午前10時~午後6時

第三空間

禪と浄土

宗教の彼方、新たな地平

会場: 久松真一記念館

岐阜市長良福光228-2

開館時間: 午前11時~午後5時

混沌が深まる時、其実を告げる者は、かえって忘却の闇に閉ざされることがあります。その声は時代をつかさどる為政者に定評を辿る精英な言葉を投げかけるからです。

しかし、世界がその存在を必要としているならば、人間は衆知を慕ってその人物を思い出すなくてはなりません。

修道、教学の研究、発展においては近代浄土宗を代表する偉僧、法然によって開かれた真実の伝統と今を再びつなぐため、宗門の異端者として生きることをいとわなかった改革者、また、市書に生かすことから決して遠慮しない運命したる教者。仏教に立脚することで、かえって他の宗教、哲学に開かれていった靈性の巨人。こう書いてみても、この人物の断片を伝えることしかできません。

山崎弁栄は多くの書簡を残しています。また、各地で行った講義を含め、没後その高弟、田中永次によって編纂された手巻を超える書物として残っています。

それらの書述とともに、彼は多くの書と画を残しました。それは余程なほど(講義や書簡と同じく)彼の教團の中核をなす営みでした。

宗教者の「コトバ」それは其心の悲願でもありますが一は、必ずしも書画で表現されるとは限りません。彼の書画は、書籍に記録できない、彼が残した「コトバ」です。

今年2010年は、山崎弁栄(1859~1920)が没してから、ちょうど90年になります。彼が開いた光明主義に帰依する人々には別に、彼を知る人は現代では決して多くはありません。今、それらは、彼の「遺言」となっています。遺言は読まれ、それが実行されたときに、その役割を果たしたことになります。遺言はさらに多くの人に読み取られるのを待っています。

本展覧会は、山崎弁栄の書画、さらにその両声を伝える書簡、彼の思想の現場を垣間見せる幕録、宗教活動に用いられたオーディオなどを展示し、併せて展覧会図録を発行いたします。



主催: 山崎弁栄展実行委員会 / 協力: 久松真一記念館 / 後援: 光明閣、光明修養会、空外記念館、当麻無量光寺

☆記念シンポジウム: 河波昌(東洋大学名誉教授) × 若松英輔(文芸批評家)

平成22年10月31日(日) 午後2時~午後3時30分 県民文化ホール未来会館

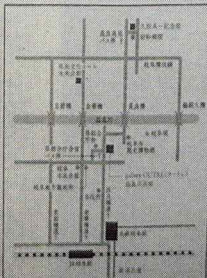
※入場は無料です。※定員になり次第、締め切ります。入場のご予約・お問い合わせは、長良川画廊まで。

※山崎弁栄展、およびシンポジウムの観覧・入場は、ともに無料です。

※展覧会図録(2,500円)を発行します。ご予約・お申込は、長良川画廊まで。

『山崎弁栄展その後』を開催します。
第四の空間~忘却の彼方から、魂との対話
全期: 平成22年12月4日(土)~平成23年2月20日(日)
(12月4日付、山崎弁栄入館の日、2月20日は休館の日)
休館日: 12/19、12/23、12/26~1/10、1/16、1/22、1/23、1/29、2/6、2/19

会場: gallery OUTRE(アウトレ)
主催: 長良川画廊
http://www.kagura-galleria.com/



長良川画廊 / gallery OUTRE(アウトレ)
〒500-8073 岐阜市長良16
TEL: 058-263-1122

○バス: 長良川駅、長良川駅西口から15分
長良川バス停で徒歩約5分
○タクシー: 長良川駅、長良川駅西口から15分
長良川バス停で徒歩約5分

久松真一記念館
〒500-0887 岐阜市長良6228-2
TEL: 058-241-5167
○バス: 長良川駅西口から15分
長良川バス停で徒歩約1分
○タクシー: 長良川駅西口から15分

県民文化ホール未来会館
〒500-0841 岐阜市長良717-2
TEL: 058-296-0801
○バス: 長良川駅西口から15分

れているのですが、これはその図録です。

偶々ある人が、この方は在家の方なんですけれども、このたび、発心ほっしんされました、山崎弁栄上人の展覧会を開いておられます。

その展覧会の会場は愛知県内ではなくて、お隣の岐阜県岐阜市です。

岐阜市の長良川画廊という画廊でして、十月三十日に始まりまして、十一月の十四日までやっております。今、なお、その最中です。

この方は、十代の時に弁栄上人が描かれた絵に出会われたんであります。初めてご覧になったわけですね。そして、非常な感銘をお受けになったのです。

それから、弁栄上人の尊さに心打たれて、非常に多くのことを感じられ、いつか弁栄上人をこういうふうに展覧会を開いて、世の中の人々に知って貰いたいと思われたそうです。それで、この展覧会を開かれたというわけでございます。

私のお寺に弁栄上人の書画がいくつかありますので、その展覧会のためにお貸ししたんです。

弁栄上人はどのような絵をお描きになられたかと言いますと、例えば、こんな絵を描いておられます。（口絵1ページ）

これは、雲上の阿弥陀様と言いましてね、非常に細かく描いておられます。美しい、尊い阿弥陀様のお姿です。

それから、こちらは美しい、本当に美しい観音様の絵ですね。（口絵2ページ）

この絵は私のお寺から出品させて頂いていますが、本当に美しいですね。

こういう絵に囲まれて、私のお寺でもお念仏ねんぶつ会をさせて頂いていますけれども、これらの絵をご覧になって、阿弥陀様の尊さを感じ取られる方もいらっしゃいますし、涙を流される方もいらっしゃいます。そのために弁栄上人は絵を描かれたわけですね。

弁栄上人の書

それから、弁栄上人は字も書かれる。その字の書き方というのがとても上手じょうずなんですけれども、普通ではない書き方をなされるんですね。弁栄上人は曲芸まが紛まがいのことをして字を

書かれるんです。

右の手に筆を持って、例えば法然上人のお歌で、月影の歌という有名な歌がありますね。

月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ

光明こうみょう遍照へんじょう十方世界 念仏衆生ぜんぶしゅうじやう攝取不捨せつしゆふしや(阿弥陀仏の慈悲が広大で、念仏する衆生を悉しつじつく濟度さいどするのを光明が遍あまねく照らすのに例たとえる觀無量壽經の言葉)のお心を法然上人が歌われたものなんです。それを右手で書きます。

そして今度は左手で、やはり法然上人のお歌、

阿弥陀仏と心は西にうつ蟬の・・・？

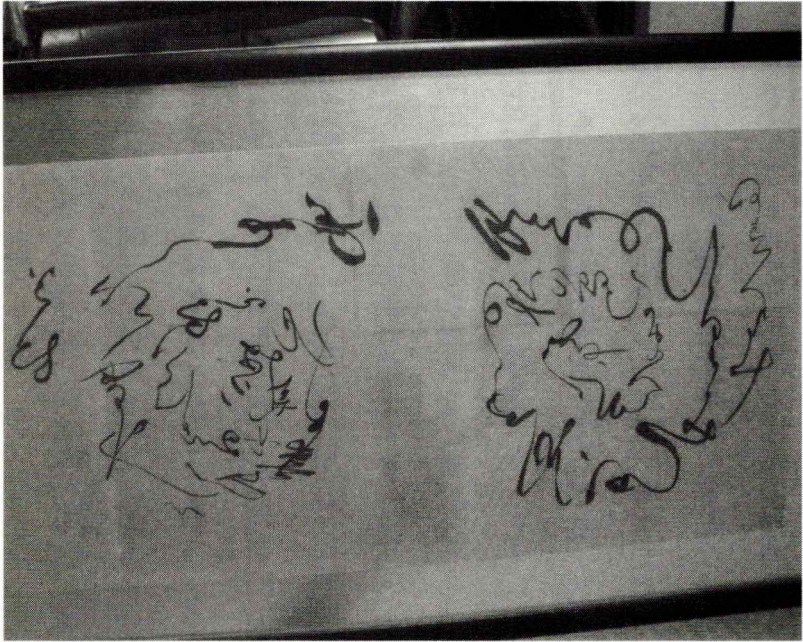
えー、ちよつと、これはやめておきましょう。この後が浮かんで来ません。失念致しました。他のお歌にします。他にもいっぱいありますのでね。

えー、と言つても、なかなか出て来ないですけども・・・。

あみだぶといふより外は津の国の難波のこともあしかりぬべし

こういうお歌を一遍に両手で書かれるんですね、同時に。

弁栄上人書 和歌二首 (左右両手同時書き)



△右側の歌

ぬす人よけ

月と日の

ひかりみつれば白なみの

夜の間の間に

かくれがはなし

△左側の歌

火伏

雨あられ

雪や氷をかきあつめ

火伏にむすぶ水茎のあと

例えば、わたしたちが、右手と左手、両方に筆を持つて、右手で○を書きます。そして左手で△を書きます。すると、両方とも○になっちゃうんですね。なかなか右手と左手を同時に使うということは、難しいですね。右と左と、違うことをやるのは難しいことです。昔、水森亜土ちゃんという漫画家の方がいらつしやいました。ガラス板の向こうから、右手と左手と、両手で同時に書いた。

亜土ちゃんはね、右手と左手で左右対称に書くんですね。左右対称なら書けないことでもないかな、とは思うんです。

弁栄上人は、右と左と違う字を書くんです。ちよつと常人じょうじんではできないことですね。その他にも弁栄上人のすごいのは、口に筆をくわえて、もう一つ、例えば法然上人のお歌で先ほど出損でそこないましたけれども、

阿弥陀仏と心は西にうつ蟬のもぬけはてたる声ぞすずしき

あー、ようやく出ましたね。そんなような法然上人のお歌ですけれども、そういうものを、三つ一遍に書かれたわけですね。

米粒に細字

それから小さな米粒こめつぶに南無阿弥陀仏という名号なごうとか般若心経はんにゃしんぎょうを書かれるとか、ね。

千葉県松戸市に善光寺というお寺があります。これは弁栄上人が創建されたお寺なんです。二歳の時に空中に想見されましたが、そのような弥陀三尊を、米粒に描いてあるんです。

そのお寺をお訪ねした時に、私はその米粒を見せて頂いたんです。それにはルーペが付いていまして、よく見ると、本当に細かいところまで描いてあるんです。小さな米粒に、本当に素晴らしい弥陀三尊が描かれていて、びつくりしました。

弁栄上人は、平気でそんなことができた方なんです。

その他にも、こんなものもあります。例えばね、「どうぞ、この紙を持ってください」と誰かに頼んで持ってもらい、両手で書くんですね。左手で、上から、南無阿弥陀仏と書かれ、右手で下から、仏陀弥阿無南と書かれる。それも一度に、同時に書かれる。

まあ、そんなようなこと、まさに曲芸じみたこともされたようでした。

弁栄上人の教えの特徴

それで、弁栄上人という方は、そんな曲芸じみたことをしながら、わたしたちに何を伝えようとされたのでしょうか。これが一番大事なことなんです。

弁栄上人の教えの特徴というのは、光なんです。

人格身（報身）として阿弥陀様がすぐ目の前にいらつしやると思つて、念仏しなさい、と勧められてはいるのですが、実は阿弥陀様の光のことを言っておられるんです。

私たちの周りには、阿弥陀様のお慈悲の光が遍満していて、誰もがその中に生かされているんだから、お念仏を通して、そのお蔭を感じ、喜んで生活をさせて頂こうという教えなのです。

光というのは、生かしてくださいとさるあらゆる御蔭さまのことなんです、ね。

光に出会うというと、何だか特殊なことで、特別な人にしか許されないことの様ですが、実際は、心の底から全てをお蔭さまとして喜べることなのです。

吉良へ来られた弁栄上人

まあ、弁栄上人は本当に無私無欲の方で、お米や着る物、履物など、もう何でも頂いた物を人へ上げちゃうんです、いろんな人に、ね。このお寺（徳雲寺）の颯田本真尼さつたほんしんさんと一緒です。偉い方というのは、皆、そうなんでしょうかね。

【注】颯田本真尼

弘化二（一八四五）年、現在の愛知県吉良町吉田で生れ。一二歳で、現

在の碧南市、浄土宗貞照院（総本山は京都の知恩院）で得度。一八歳の時、吉田に慈教庵を創建、明治一六年、本堂を建て、徳雲寺と改名。津波や地震の被災者救済のため九州から北海道まで三四年間に全国一五〇カ所余を訪ね、衣類・食品等を配布した。慈善事業・念仏弘通くわうつうに専念し、布施ふせの実践家・生き仏と慕われた。昭和三（一九二八）年遷化せんげ。

弁栄上人は、吉良へよくいらつしやいました。一番初めに愛知県に来られたのは、実はこの徳雲寺なのです。この徳雲寺と、近くに阿弥陀堂という所があるそうですね。近くの庵主さんにお聞きしましたが、皆さんは、ご存じですか。今、そこには、ご住職はいらつしやらないので、どなたかが管理していらつしやるそうですけれども、その阿弥陀堂と、

ここ徳雲寺。これら二つのお寺に初めていらっしやって、お説教をされたんですね。

ですからこの徳雲寺というお寺は弁栄上人に非常にご縁の深いお寺なんです。

颯田本真尼さんという方は、弁栄上人より一回りくらい年上の方です。弁栄上人が三河へ初めていらっしやったのは、明治二十八（一八九五）年ですので、本真尼さんが五十一歳くらいだったと思うんです。弁栄上人は、その頃、三十六、七歳くらいでした。

それで、なぜここへいらっしやったかと言うと、三河出身のお弟子さんが連れて来られたからなんですけれども、弁栄上人はね、当時では珍しく、三十五歳の時に、インドへ行かれたんです。明治二十七（一八九四）年にですね。その頃、洋行される人はあったけれども、インドへ行った日本人はいなかったんですね。一人お坊さんで、弁栄上人の前にインドへ行った方があったけれども、仏蹟参拝をされたお坊さんというのは日本人では初だったと言われております。それよりずっと前、鎌倉時代に明恵上人（鎌倉時代の華嚴宗の僧。華嚴・密教を学んだ後、京都・梅尾とがのおに高山寺こうざんじを営み、華嚴宗中興けごんしゅうちゅうこうの道場とした。又、宋より将来した茶を栽培した）という方がインドへ行きたくて何度も試みたけれども失敗

してしまった。弁栄上人もお釈迦さまに対する憧憬しよつげいがものすごく強い人だったので、明恵上人もそうだったんですけれども、やはりそういう人は、一度はインドへ、お坊さんである以上は行きたいわけですね。明治二十七（一八九四）年で、まだ旅をするにも大変な時期だったと思いますけれども、インドへ行かれました。三カ月掛けて行って帰っていらっしやったんですが、インドから帰って来たお坊さんというので、当時は、ちよつと有名になつていたんじゃないかな、と思います。そして又、曲芸じみた事をされるから、あちこちから珍しがられて、声が掛かったのだと思います。

お弟子さんが弁栄上人に、「単なる奇僧、変わったお坊さんだと思われてしまうので、そういう事はおやめになつて、教えを説くだけにとどめておかれたらどうですか」というふうにおっしゃるんですけれども、弁栄上人は「いや、これがご縁になるんじゃない」と。

例えば、名号みょうごうを南無阿弥陀仏と書いて差し上げますと、普段、念仏なんか唱えたことはないという人でも、「何と書いてあるのかな、あつ、南無阿弥陀仏」と声に出して読みますからね、それがご縁になるんですね。そういうご縁を通して、阿弥陀様のお光への気づき

に至る所に広めて行き、生涯にわたって、無私無欲で慈悲を説かれたのでございます。

宗教を超えた弁栄上人

私のお寺、法城寺は弁栄上人が開山ですから、とてもありがたいご縁を頂いて、喜んでおります。私はお坊さんの学校を卒業する時、実はこの人を卒業論文で取り上げたんです。今から二十五、六年前になりますけれどもね。

そんなご縁があつたんですけれども、ただ卒業論文で取り上げた割には、弁栄上人というお方をよく分かっていなかった。絵が素晴らしいし、書も面白いし、音楽も作るし、哲学も論じる。いろんな才能を通じて説いていらつしやるんですけれども、お話になる内容はなかなか難しいんです。

この展覧会を開いた方がおっしゃっておられました、実を言うと、この方はクリスチヤンなんです。お念仏を一言も唱えたことがない人なんです。ところが、弁栄上人の絵を見て、ハッシと心を打たれてしまったそうです。弁栄上人は宗教を超えていたんです。

というのも、弁栄上人の表現は、キリスト教的な表現が多いんです。阿弥陀様という大いなる御親様、阿弥陀様というのはお名前ですからね。おおみおや、これは恐らく、大御親と書くんでしょうけれども、大御親さんと呼び掛けておられます。こういう呼び掛けの表現はキリスト教的でもあります。

だからその人も、キリスト教の人が書いた物を読むよりも、弁栄上人が書いた物を読むほうがキリスト教の事が深く分かると、おっしゃっておられる。なぜかと言うと、弁栄上人という方は、キリスト教やら、マホメット教やら、仏教の中でも、法華経ほけきょうも、浄土教も、それから密教も、全て。西洋哲学でも、プラトンも、アリストテレスも、ソクラテスでも、はたまた老子とか孔子とか、そういうあらゆる教えを独学で学ばれました。

そして、ご自身が出会われた真実の光を一つの枠にとらわれず、色々な表現で表わしておられるんですね。だから仏教者でなくても、心に響いて行くわけなんです。

まさに、それは鎌倉時代の、法然上人の当時は、仏教の宗派が少なかったんですが、南都なんど（奈良のこと）の六宗（三論・法相ほつそう・華嚴けしん・律・成実じじょうじつ・俱舎くしや）と平安（京都）の二宗（天

台・真言)、合わせて八宗、それから禅宗を入れて、九宗しかなかった時代です。その九宗を法然上人が一宗におさめて、浄土宗という宗派を開かれたのと同じです。

弁栄上人という方は法然上人亡き後、七百年ほど経って、新しい時代に、そういう西洋の宗教、東洋の教えを皆ひつくるめた上で全てに通ずるその根源のお蔭を説いて行かれたのです。

だからこそ、これからの時代、狭い宗派仏教ではなくて、世界に開かれて行くべきという事で、もっと注目されなければいけないわけなのです。

それで、こういう展覧会が開かれたのです。だから、これが、そういう意味で、第一歩になつてゐるのではないかと思ひます。

でも、弁栄上人がおっしゃつてゐることは哲学的なので非常に難しいのです。

私は、大学を卒業する時、卒業論文で弁栄上人を取り上げて、研究させて頂きましたが、当時、私は、弁栄上人のおっしゃることが全く何も分かつていなかった、ということが、今になりました、よく分かりました。

『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』

ところが、その弁栄上人の教えなんですけれども、ある一冊の本によつて、私は弁栄上人に初めて出会うことができたんです。

それは『飛鳥^{あすか}へ、そしてまだ見ぬ子へ』（井村和清著・祥伝社）という本です。

これは昭和五十五（一九八〇）年四月に出版された本です。ベストセラーにもなり、映画にもなっています。

私が高校生の時にこの本が出たのを知っていましたし、映画も名高達男さんと竹下景子さんと上映されました。でもその時は、まだ縁がありませんでした。その映画の存在は知っていましたが、まだ見る気にはなれなかったのですね。

ところがね、五年ほど前に、やはりテレビで、スマップの稲垣吾郎さん主演でこのドラマの放映があったそうですね。

ご覧になられた方は、ありますか。『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』という本の題名と同じ題のテレビドラマです。

私は本との出会いが先でした。この本を読んで、初めて弁栄上人が私にとつて無くはない方だったと気付かされたんです。つい最近のことで、恥ずかしい話ですけれども。

この本は、どういふお話かと言いますと、昭和二十二（一九四七）年に富山県で生まれた若い青年医師の話なんですが、三十一歳で亡くなってしまわれるんです。その娘さんが飛鳥ちゃんと言う名前でした。又、もう一人、奥さんのお腹の中に赤ちゃんがいたんです。

その二人のお子さんに、『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』という題で、手記として、遺書として、この本を遺されたんです。その著者は井村和清先生というお医者さんなんです。昭和二十二年生まれですから、いわゆる、団塊の世代の方で、実家もお医者さんでした。日大の医学部を卒業されて、医者になられた後、沖繩の病院に赴任されます。

沖繩という所は、私は行ったことはないんですけども、気候は暖かくて、いい所ですし、人の心も大変温かい所だ、と言われています。

ちよつと前に亡くなりました（二〇〇六年、七二歳で）が、灰谷健次郎さんという児童文学の作家がいましたね。この人は元々小学校の先生をやっておられまして、子供が心

の底から可愛いのだけれども、いろんな軋轢あつれきがあつて、なかなか思うように教育することができない。そういう中でいろいろと傷つき、学校の先生を辞められたんです。で、沖縄へ行った時、沖縄の人たちに救われた、と言っていました。

沖縄にはいろんな島があるけれども、島の人はみんな家族みたいなんですね。

例えば、一人の認知症のお婆さんが夜中に徘徊はいかいして、どこかへ行ってしまったとしても、寝ている島中の方が、皆、起き出して、そのお婆さんを捜し出すんだそうです。

又、外から来た人をも、家族がその子供を迎えるように受け入れてくれるそうです。

だから、今は観光地となって変わってしまったかもしれないけれども、灰谷健次郎さんは、沖縄は日本の原風景がある所で、本当の日本人の心が今でもある所だ、と言っておられました。

沖縄はそういう所でしたので、井村先生も赴任先に選ばれたのかもしれないですね。

そこで、沖縄の女性を見染め、結ばれ、そして飛鳥ちゃんという可愛い赤ちゃんができたわけです。

井村先生 大阪へ

それから三年ほど経ちました。その頃、大阪・岸和田に徳洲会病院という病院ができました。徳田虎雄先生という方が、それまでの医療は、どうしても本当の意味で患者さんの立場に立った病院医療ではない。そんな中で、本当に患者さんの気持ちになって、患者さんの心に寄り添った、患者さんのための治療ができる病院を作ろうじゃないか、というので、発心されたんです。そこで、大阪・岸和田に徳洲会病院という病院を開かれたのです。

「私と一緒に新しい病院を作って行きましょう」と、徳田先生は大勢の有望な先生たちを集められました。

井村先生は真面目で、優しく、思いやりのある、又、お写真を見ると、とてもハンサムな、知的な方なんです。ですから、多くの患者さんからも信頼された素晴らしい先生だったので、徳田先生は、この井村先生にも白羽の矢を立てて、「私と一緒に患者さんのための病院を作って行きましょう」ということで、大阪に来てもらったのです。

そして、みんなで本当の医療というものを目指して病院を運営して行かれたのでした。

井村先生 右脚を切断

ところがね、沖縄から本土に戻った井村先生は、本当に胸に希望いっぱいですよ。美しい奥さんをもらって、可愛い子供もできた。さあ、これからだ、という矢先だったんですが、右脚に違和感を覚えるようになったんです。おかしいな、と思って、レントゲン技師に写真を撮ってもらったら、そこに腫瘍しゅようができていたんです。井村先生は内科の先生で、しかも癌がんの専門医でしたので、写真を見てすぐに判ってしまわれたんです。悪性の腫瘍、肉腫にくしゅ、癌がんだったわけです。それは、そのまま放っておくと、転移してしまうから、脚の付け根から切断しなくてはいけないということで自分で決断して、手術を受け、右脚を切断されたのです。そんな中でも、リハビリを頑張って、頑張って、半年後には病院に復帰します。患者さんや病院の先生、事務の人たちの拍手のもとに復帰できたわけです。復帰しても今まで以上に頑張って、人一倍仕事をされたそうです。

先生は、ご自分の事を不幸などとは一切思うことなく、脚を切断したことによって、却かえって、人の心の痛みとか、悲しさとか、そういうものがよく分かるようになったし、また人の

優しさというものを本当に感じさせてもらったことができた、と言っておられます。

又、病院ではね、患者さんが「脚の悪い先生」と呼んでくださったそうです。他のお医者さんはなかなか名前を覚えてもらえなくても、その先生は顔と名前をすぐ覚えてもらえる。だから病気になって良かったかもしれないな、とおっしゃっておられました。

本当に前向きな先生でした。

転移して肺癌に

義脚を引きずりながらですけれども、医療に復帰して、本当に思いやり深く患者さんに寄り添って、やっぱり信頼されながら、みんなのために生きておられたけれども、皮肉なことに、転移しないために右脚を付け根から切断されたにもかかわらず、三カ月後に、どうも咳が出るなあ、と思って、又、レントゲン写真を撮ってもらったら、両肺にその腫瘍が転移していたそうであります。

専門医ですから、写真を見て、一目瞭然に悟ったのであります。自分は、後半年の命し

かないんだな、と。

医療活動をできる限りやって、死ぬまで患者さんに寄り添って行きたいけれども、せいぜい後二カ月で、それを過ぎたら、もう仕事はできないだろう、と自己診断をされるわけです。

初めのうちは、誰にも言わなかったんです。他の先生やご両親や奥さんにすら言わなかったんです。心配を掛けなくなかったからです。

頑張っていたんですけれども、やがて、みんなの耳に入ってしまった。

そうしましたら、ご両親は心配ですから、どうか富山の空気のいい所に帰って来て、自分たちの下で療養してくれ、と懇願する。徳田理事長も、田舎へ帰って、家族水入らずの時間を過ごすよう勧めるんですけれども、井村先生は頑なに断って、最後の最後まで一人の医師として働き続けたい、とおっしゃったのでした。

ご自分の診断では、後二カ月でしたけれども、結局亡くなる一カ月前まで約四カ月間、医師として働かれました。ところが、もう、さすがに悪性腫瘍ですから限界に達しまして、ある日、車を運転していましたら、眩暈がして、前が見えなくなり、もうこれ以上運転はでき

ない、歩けない、というところまで頑張られたのでした。

もはや、これまでということ、富山へ帰る決心をされます。

「もう、無理」と職員に挨拶

最後の朝礼の時に、もう今日でさようなら、というお別れの日、井村先生は病院の職員や先生たちの前で挨拶をされます。

「患者さんたちは、みんな同じ三つの悲しみを背負っています。

一つは、末期癌ですから、もう助からない。死んで行かなければいけない、という苦しみ。そういう悲しみが一様に誰にもあります。

そして二つ目は、医療というのとはとてもお金が掛かりますから、湯水ゆみずのようにお金がある方なら心配はないけれども、普通の人の場合は、やはりお金のことが心配でしょうがない。病気にまして、それが輪を掛けて、苦しみになるわけです。それが二つ目の悲しみです。

三つ目の悲しみは、先の二つ、病気の苦しみとお金の苦しみというのは、たとえあつても、

その苦しみを分かち合ってくれる人がいるならば、楽になるんです。支えてくれる人がいるならば、苦しみは苦しみではなくなるんです。ところが世間には、そういう苦しみを一人で抱え込んでしまっている人がいっぱいいる。この病院にもたくさんいるんです。家族であるとか、仲間であるとか、そういう人たちが身近にいる人はいいけれども、誰にも相談できず、全部自分で抱え込んで、自分の責任で受けてしまう苦しみ。そういう三つの悲しみを抱えている人たちがたくさんいるんです。

私はそういう人たちのために何もして上げることができなかった。代わって上げることができなかった。でもやっぱりそういう人たちに常に寄り添って行きたい。そういう人たちの傍そばにいて、心の支えになって上げたい。私は常にそう思っていました。

だから、皆さん、先生方も、看護師さんたちも、できれば少しでも患者さんの心の痛みを受け止めてあげて頂きたいのです。どうか、お願い致します」

そういう願いを遺のこしてですね、病院を後に行かれます。自分自身が後二カ月の命しかないのに、最後まで患者さんのことを心配した言葉を遺して行かれたのであります。

徳洲会病院の徳田虎雄理事長は、『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』に書いておられます。

「人間の体力と医師の良心の限界まで医療に尽くし切った、そして二度と病院に復帰することのないことを覚悟した井村和清先生の言葉は、あふれる涙で顔を上げることもしない岸和田徳洲会病院の全職員の胸に熱く、そして鋭くしみわたっていった。それは、井村先生が永眠される一カ月前、徳洲会病院の朝礼に最後にのぞまれた時のことであつた……。」と。

故郷へ帰る

昭和五十三年の十二月のことでした。富山のお父さん、お母さんの下もとに帰られまして、残り一カ月間で、この手記を娘さんたちに遺されます。

先生は、年が明け、お正月をみんなで過ごした頃には、もう自分では起き上がることもできなかつたのです。

患者さんから厚い信頼を受けていた人ですし、仲間もいっぱいいましたので、富山へ帰つてからも、千羽鶴や手紙やらがいっぱい届くわけですね。初めは、それを自分で読んでいた

んですけれども、最後は、もう手紙を持つ力すら無くなってしまいました、お父さまが和清先生の耳元で先生に代わって、丁寧に、ゆっくりと、その手紙を読んでくださったそうです。

和清先生は、もう何度も意識が飛び掛けたそうですけれども、朦朧もうちろうとする中、その手紙の言葉を聞きながら、優しい笑みを浮かべて、みんなの一言一言ひことひことにうなずきながら、

「ありがとう、ありがとう、みんな、ありがとう」と言っ、息絶えて逝かれたそうです。あります。三十一歳の若さでした。

生前やりたかったこと

小さな子供ともう一人、奥さんのお腹の中に赤ちゃんがいましたから、やっぱり、無念の思いがいっぱいであったと思います。

井村先生は生前に、後五年命があつたならば、どうしてもやりたいことがあつた、と言っておられました。先生は病院を建てたかったです。

徳洲会病院というのは、とってもいい病院だったんですけれども、患者さんの視点になり

きった病院であるとは言えなかったんですね。

でも自分のように本当に障害を持ってしまった人間にとっては、そういう立場で病院を作ることができる。だから後五年命があれば、そういう人間の視点で設計した病院を作れるんだが、と言っておられました。

そういう無念さを持っておられたようであります。

しかし一番の無念さは、何と言っても、ご両親に自分の葬式を出させるということだったでしょう。それが一番辛いことだったであります。

十字架を背負っても明るい光を

井村先生は、おっしゃっていました。

「本当に大きな十字架を背負ってしまったかもしれない。大きい、大きい十字架を背負ってしまったかもしれない」と。

だけど、先生はその十字架を一度も重いとは思ったことはなかったそうです。

「なぜなら、みんなが私の大きい十字架を担ぎ上げてくれて、みんなで支えてくださった。私は何だか、とても軽いスキップをするような思いで、足取り軽やかに歩いて来たような気がします。本当に病気をしたお蔭で、私が自分を思う以上に、みんなが私を思ってくれていることを知りました。そして又、片脚は切断しなければいけなかったけれども、もう片方の脚があるんだということに気づきました」

先生はそういう命を頂いていたことに対する喜びというものを感じておられたのです。

井村先生は自分が肺癌だと判ってから、表に出られた時に、

「世の中が輝いている」と感じられたそうです。

全てのものが、何とも言えぬ美しさで、光って見えたそうです。

そういう輝かしい体験をしておられます。

その体験は、当然、弁栄上人等のお悟りとは、深い、浅いの違いはありません。しかし全てが同じように光り輝いて見えた。それは大いなる命の真実に触れたということなのです。

又、「病気をしたことによって、患者さんたちの立場を理解することができるようになっ

た。病気のお蔭です」とも言っておられます。

とにかく井村先生は、全ての出来事に感謝をされて逝ゆかれたのであります。

それが、たとえ自分の命を奪う病気であったとしても…。

「祈りとは、感謝ですね」とあらゆるものに感謝をして逝ゆされました。

それが、井村先生の一生だったのです。

私は、この手記を読んだ時、大変心を打たれました。そして、素晴らしい先生に出会わせて頂いて、次のように思ったものです。

こういう人こそ本当の人間なんだな。私のような者は人間じゃなかったなと思いました。そんな思いが胸に迫って来たのであります。

感銘を受けた五冊の本

一人の完全に燃焼し切った尊い青年医師のお話を紹介させて頂いたわけですが、今まで
は弁栄上人と井村先生とは直接関係がなかったんです。

ところがね、二人の娘さんたちへの手記の中で、自分が三十一年間に読んだ本の中で、とても心に感銘を受けた本が五冊（【注】参照）ある、とおっしゃるんですよ。

この人はクリスチャンなんです。ですから、その中に『聖書』が入っていましたけれども、あるいはサンテグジュペリの『星の王子さま』とかね。

子供さんには、是非読んでほしいという童話や、絵本を挙げられていたのですけれども、そういうものを挙げられた最後に、五冊目の本として、山崎弁栄上人の『無辺光』という本が挙げてあつたんです。

【注】一、『こねこのかくれんぼ』（新潮社「坪田譲治全集」第8巻所収）九歳の時感激した。

二、『聖書・マルコによる福音書』十五歳のクリスマスに自らの意志で受洗した。

三、遺稿集『母』昭和45年12月、実母一周忌記念に、自ら編集、多数の人に喜ばれた。

四、『星の王子さま』（岩波書店 内藤濯^{あつろ}訳、フランス・サンテグジュペリの作品）大

学生になって初めて読み、人の心と、人にとって最も大切なものを教えられた。

五、『無辺光』（講談社 山崎弁栄著）以上『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』による。

山崎弁栄上人の『無辺光』

私はそれを見て、さらに衝撃を受けてしまったんです。ええつ、とびつくりしました。そこで初めて弁栄上人が出て来たのですけれども、「(この本は)肺に肉腫が転移してから読みはじめた本です」と書いてありました。だから亡くなる半年くらい前に初めて読まれた本なんです。

『無辺光』は、内容が非常に難しい本ですが、宇宙の真理について静かに語りかけてくれる本です」とおっしゃってられます。

それで、私もね、弁栄上人の『無辺光』をもう一度出して読んでみたんです。

かなり難しくってね。よくこの本が、そんなにも井村先生の心に響いたな、と思うほどそんなに難しい本だったのです。

でも、それはきつと言葉を超えて、弁栄上人の宇宙観・世界観というものに感応されたからでしょう。阿弥陀様の光が、言葉を超えて、井村先生に語り掛けて来たからでしょう。

だから井村先生は最期に「棺の中に、この本を入れてください」と遺言まで遺されたの

です。

お義母かあさまはその遺言通り、棺の中の先生の胸の上にこの本をそつと置いたそうです。

弁栄上人の教えはちよつと難しいんですけど、実はそういうことだったんです。

私はこの井村先生を通して初めて弁栄上人に教えられたような気がします。そして初めて弁栄上人を身近に感じる事ができたんです。

井村先生の詩

最後に、井村先生が亡くなる二十日前、お正月に作られた詩があります。

それは、ありがたい詩でありますけれども、井村先生の最終的な人間観であり、宇宙観であり、人生観そのものでもありますので、ここで、ちよつとご紹介させて頂きたいと思えます。

そして、これが弁栄上人に感応した世界なんです。

「あたりまえ」という題の詩なんです。

あたりまえ

あたりまえ

こんなすばらしいことを、みんなはなぜよろこばないのでしょう
あたりまえであることを

お父さんがいる

お母さんがいる

手が二本あって、足が二本ある

行きたいところへ自分で歩いてゆける

手をのばせばなんでもとれる

音がきこえて、声ができる

こんなしあわせはあるのでしょうか

しかし、だれもそれをよろこばない

あたりまえだ、と笑ってすます

食事がたべられる

夜になるとちゃんと眠れ、そして又朝がくる

空気をむねいっばいにすえる

笑える、泣ける、叫ぶこともできる

走りまわれる

みんなあたりまえのこと

こんなすばらしいことを、みんなは決してよろこばない

そのありがたさを知っているのは、それを失くした人たちだけ

なぜでしょう

あたりまえ

和清

(昭和五十四年一月一日、新年の贈り物)

「あたりまえのことこそがすばらしい、ありがとう」と、そういう感謝の詩であります。あたりまえのことなど一つもないという真実は、失くして初めて分かるのかもしれないけれども、しかし本当は、失くさなくても分からなくてはいけないのです。

私たちは、こうして言葉をしゃべることができる。目で物を見ることができる。息を吸うことができる。

そんなことはあたりまえ、としか思っていないけれども、実際には目が見えない人がいるわけですし、そして歩けない人だっているわけですから、決して全員があたりまえじゃないわけです。にもかかわらず、今、目が見える、息ができるということは、大いなる命のおはたらきを、今、ここに、頂いて生かされている、ということに他ならないのです。

生きているということは、実は、日々奇跡を頂いていることですよ、ね。

大いなる命に生かされ、大いなる光に照らされているのです。

極樂への光の道

そういうお蔭さまへの感謝ということは、人として真っ先にしなくてはいけない務め（つと）めなのではないでしょうか。ところが自分でそれをあたりまえにしてしまつて、しかも愚痴（ぐち）や不平や不満を上塗りし、自ら地獄を造り出しているというのが我々の姿なんです。ね。

そのことに気付かされて、感謝して行く方向に心が向かい出した時、初めて大いなる命の根源である存在と、一つになつて行くことができるのです。

極樂への光の道が開かれて行くのです。

お念仏をすれば、極樂へ生まれることができるというのは、南無阿弥陀仏という本願の呪文（じゆもん）を唱えれば、どんな悪いことをしてしまつても、阿弥陀様が助けてくださるといふ、そんな話ではないんです。

阿弥陀様という方は、すべての存在を、生かしてくださる根源の命のことです。

だからこそ、一人も漏れる人がいないし、誰でも一人残らず、気づかせて頂くことができます。その感謝の気づきこそが、お念仏なのです。

みんな、ありがとう

これ、私、去年、ちよつとお話しさせて頂いたんですけれども、南無阿弥陀仏を日本語で言ってみましょう、ということですね。

そうすることによつて、初めて本来の意味がはつきりするのです。その時は、「全てが、お蔭さま、ありがとうございます」という言葉である、と申し上げました。

それが、まさにお念仏なんです。それは、日本語にすれば、いろんな言い方がありましよう。もつと南無阿弥陀仏に忠実に言うならば、「命のオヤ様、ありがとう」、「大いなる命の光よ、ありがとう」とも言えるでしょう。そういう言葉なんです。

井村先生も「みんな、ありがとう」と言つて亡くなられました。これも又、広い意味での南無阿弥陀仏です。

そういう言葉を唱えることによつて、自分が偉いから生きているとか、全て良くてあたりまえ、とかいう、思ひ上がった心が自然に破られて行き、又、感謝させて頂く喜びによつて、自然に我が解とけ落ちて行く。そして初めて人となつて行くことができるんですね。

終わりに

一番大切なのは、この南無、「ありがとうございます」という尊い、尊い言葉なのであります。本当に南無阿弥陀仏という、すごいお言葉をお釈迦様は見出しみいだしてくださったものだ、と思いますけれども、そのお心は、生かされている大いなる命への無条件の感謝なのです。生かしてくださるすべての命への無条件の感謝なのであります。それが、一息、一息ごとにできるということなのです。一息ごとに生かされているのですから、一息ごとに感謝させて頂けるといふことですね。

弁栄上人がおっしゃいますように、感謝によって初めて、過去も、現在も、未来も、仏教だけでなく、キリスト教だけでなく、全ての宗教をひっくりかえして、しかも、それを超えて、仏さま、神さまと表現するしかない、根源の命と一つにつながる道が開かれて来るのであります。極楽往生というのは、その延長線上にあることです。

今までの時代は、あらゆる個性が伸びて行く時代でした。けれどもお互いに主張し合い、喧嘩けんかし合っていた時代でもあったような気がします。

でもね、これからの時代は、このまま喧嘩していると、地球そのものが壊れてしまうんです。だから、ここらで、それぞれが、先ずそれぞれの足元に、根本こんぽんの所に、一旦戻って行かなければいけないんです。元々が一つの存在なんですから、一つになることはできません。今の時代はその過渡期であるような気が致します。

これから、そういう全てが一つでありながら、しかも、それぞれの個性が光って行くという時代が、どんどん展開して行くと思いますけれども、その第一歩となる、この南無阿弥陀仏、「生かして頂いて、ありがとうございます」という言葉は、やはり、尊い、尊い光の言葉であると、頂くわけでございます。

どうぞ、南無阿弥陀仏とは、今、ここに、私が生かされている、大いなる存在への感謝の言葉である、と受け取って頂いて、その心を常に唱えながら、それぞれ皆さんが、私も共々に、お蔭さまの生活に感謝させて頂き、精いっぱい生かして頂くとうと、念しながら、今日のお話を終わらせて頂きたいと思えます。本当に、ご清聴頂きまして、ありがとうございました。南無阿弥陀仏、十念。

あとがき

今回の法城寺住職齋藤乘願上人のお法話は本当に素晴らしいものでした。

前半で、弁栄上人の御生涯をご紹介くださり、後半は若くして肺癌でこの世を去った井村和清医師の短いながら、大変充実した人生をお話しくださって、心から、ああ、いいお話だったな、と思いました。そして、お二人に共通するものは光であると思いました。

「弁栄上人の教えの特徴というのは光なんです」とお聞きし、成程と思いました。今までに、阿弥陀は語源が梵語（サンスクリット）のアミターバ（無量光）・アミターユス（無量寿）であると知っていても、ただ知識だけであって何にも実感がなかったのですが、今回、無量光ということは無限に量ることができない光と無量寿すなわち無限に量ることができない命をお与えくださっている仏様であると分かりました。その既に与えられていた光と命に気付かせて頂くために阿弥陀様のお慈悲の光がすぐ目の前にあると思って、念仏を唱えなさい、とお勧めになるのです。阿弥陀様のお慈悲の光が私たちの周辺に満ち満ちている、誰もがその中に生かされているので、お念仏を通してそのお蔭を感じ、喜んで生

かかせて頂くとうと教えられるのです。

弁栄上人は南無阿弥陀仏を無知の人にも分かるように絵画・書・音楽・短歌等を通じてお説きくださったということも知り、驚きました。絵や書や短歌だけならともかく音楽まで、アコーディオンやオルガンを演奏しながら、歌を歌って、法を説くとは。本当に時代を先取りしていらっしやった立派なお坊さんだったと思いました。法城寺には弁栄上人の使用されたオルガンが残されていて、現在でも立派に音楽を奏でられるのにも驚きました。

このお法話をお伺いしてから私は、妻を伴いまして法城寺の念仏会に二回参加しました。二時間近くも木魚をたたきながら、ただ南無阿弥陀仏とだけ唱えるのです。単純なので眠たくなりますが、一所懸命にやりました。家内は肩と肘ひじが痛くなったところばかりです。

弁栄上人のお描きになった阿弥陀三尊像を見ますと、強烈な光が見えます。光というのは生かしてくださるあらゆる御蔭さまのことであって、光に出会うということは心の底から全てをお蔭さまとして喜べることに他なりません。そんなことを感じさせて頂きました。

『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』には感動をしました。もっと詳しく知ろうと思って、

早速この本を図書館で借りて読んでみました。現代の世の中にこんなお医者さんがまだいるのかと思いました。

井村医師は脚の肉腫が肺に転移しているのを知った日、世の中が輝いて見えた。スーパーの買い物客が、子供たちが、犬が、稲穂が、雑草が、電柱が、小石までが、輝いて見えたそうです。自宅へ帰ると、奥様も手を合わせたいほど尊く光り輝いて見えたそうです。

自ら身体障害者となられたからこそ新しい病院像を、最後の勤務の日に語られるのですが、最後の最後までお医者さんを貫き通す、短い人生ながら、責任を全うまことされる姿には感動を覚えました。

この若いお医者さんはクリスチャンでありながら、どのようにして『無辺光』という本を見付けて、手に入れ、そしてお読みになったのか全く驚きです。私は半田の図書館になったので名古屋の愛知県図書館へ行きましたが、『無辺光』という本はないとの事でした。

医師と雖いえども、自らの命が残り少ないと知りながら、よくぞこんなにも淡々と子供のためにと、自叙伝というか遺書というかを残せたものだと、これまた驚きです。

それは、父親として子供になんら教えも授けないまま死んで行かなければならない者としての最小限度の責任感のなせるところだったと思います。本当に立派な医師であり、夫であり、父親であつたと思います。

本文の冒頭「ふたりの子供たちへ」の中で次のように書いていらつしやいます。

．．．サンテグジュペリが書いています。大切なものは、いつだって、目には見えない。人はとかく、目に見えるものだけで判断しようとするけれど、目に見えているものは、いずれは消えてなくなる。いつまでも残るものは、目には見えないものなのだよ。人間は、死ねばそれで全てが無^{すべ}に帰する訳ではない。目には見えないが、私はいつまでも生きています。おまえたちと一緒に生きています。だから、私に逢いたくなる日がきたら、手を合わせなさい。そして、心で私を見つめてごらん。．．．

そして、井村先生はその次に、本文より先に「あとがき」を、書いておられます。最後まで書かない間に、こと切れてしまうかもしれないという理由からです。

「ふたりの子供と両親をよろしく」と奥様に言い残し、「ありがとう、みなさん。世の中で死ぬ前にこれだけ言いたいことを言い、それを聞いてもらえる人は滅多めったにいません。その点、私は幸せです。ありがとう、みなさん。人の心はいいものですね。思いやりと思いやり。それらが重なり合う波間に、私は幸福に漂い、眠りにつこうとしています。幸せです。ありがとう、みなさん。ほんとうに、ありがとう」と結んでいます。

そして斎藤住職はこの本、『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』の最後にある、「あたりまえ」という井村先生の詩をご紹介します。この詩こそ弁栄上人と井村医師の共通点があるとおっしゃるのです。

弁栄上人は、南無阿弥陀仏とお念仏を唱えることによって、この世に生かされていることに感謝を申し上げるのだと。全ての存在が、お蔭さま、ありがとうございます、であるから、とおっしゃるのです。

井村医師は、父母があつて、両手足があつて、歩いたり眠ったり、こんなにも恵まれているのを、あたりまえ、と、全く感謝もせずに私たちは暮らしているが、それらを失くし

て初めて気づくのではなく、それらに恵まれて常日頃暮らしていられることを、感謝しつつ、過ごしてもらいたい、と言っているのだと思います。井村先生は息を引き取る最後まで、ご両親にも、奥様にも、ありがとうございます、と言っていたのです。このありがとうございます、という感謝の言葉は、弁栄上人の南無阿弥陀仏と全く同じであると言えるでしょう。

私はこのお法話をお聞きしながら、是非ともこれを冊子として発行したいと思いました。法城寺の斎藤住職、この出版をご快諾くださり、その上、色々と資料をご提供くださり、本当にありがとうございます。

出版をお引き受けくださった一粒書房都築延男社長を初め社員の皆さま、それに、写真挿入に少なからずお世話になった杉浦賢次さまにも、ありがとうございます、と御礼申し上げます。

平成二十三年四月

編者 間瀬眞吾

【参考文献】 講談社『浄土仏教の思想 十四』、祥伝社『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』、岩波書店『広辞苑』、岩波書店『星の王子さま』、長良川画廊『山崎弁栄展（図録）』以上

徳雲寺法話

今、生かされてありがとう

— 弁栄上人と井村和清医師 —

2011年 5月 初版発行

2012年12月13日 初版第2刷発行



著 者 齊 藤 乘 願

編 者 間 瀬 眞 吾

〒475-0902 愛知県半田市宮路町73
TEL (0569) 22-5416

発 行 所 一 粒 書 房

(有)一粒社 出版部)

〒475-0837 愛知県半田市有楽町7-148-1
TEL (0569) 21-2130

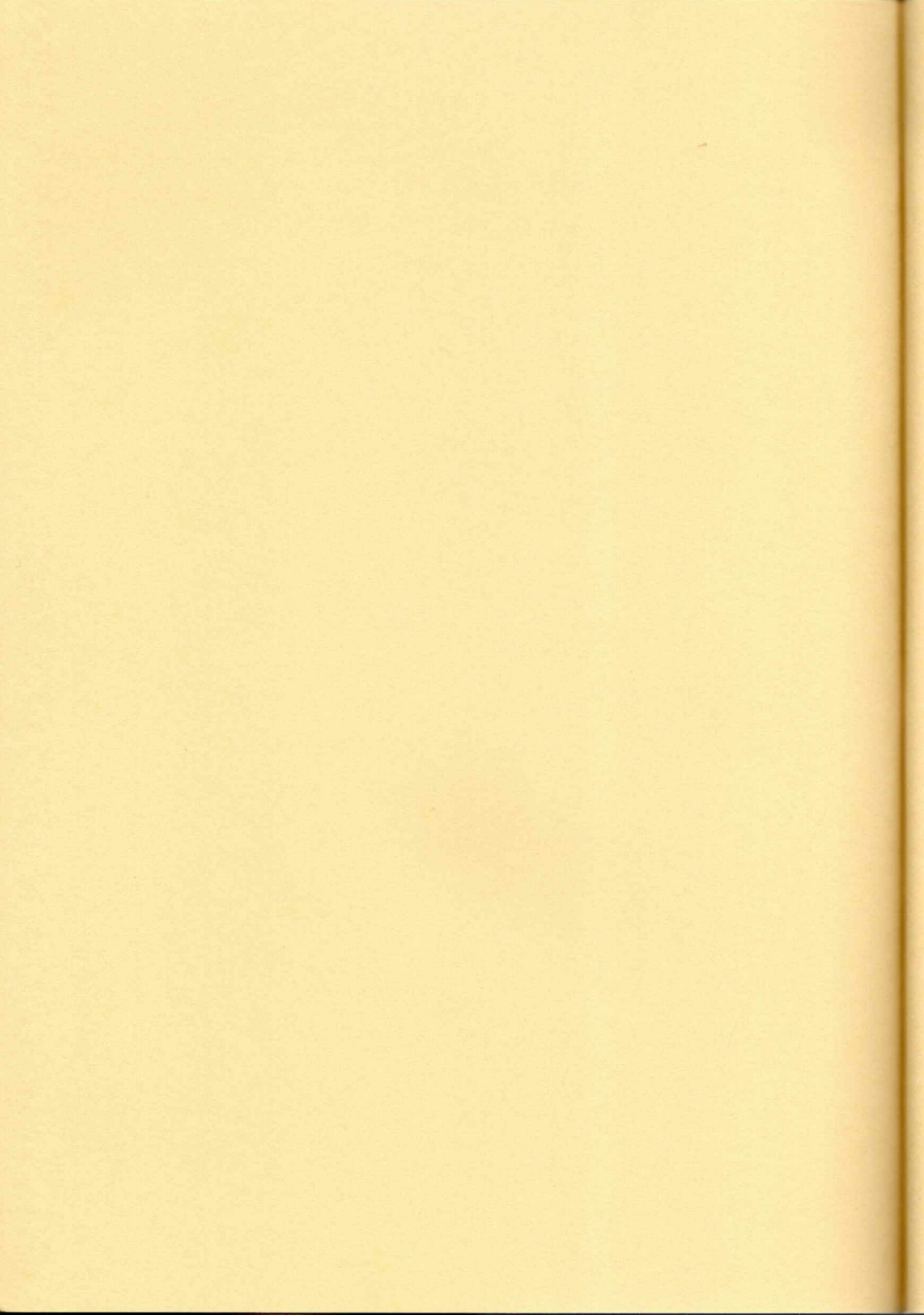
編集・印刷・製本 有限会社一粒社

© 2011, 齊藤乗願

Printed in Japan

落丁・乱丁はお取替えいたします

ISBN978-4-86431-033-8 C0015



ISBN978-4-86431-033-8
C0015

